
[成果情報名] 米国、台湾、EUへ茶の輸出を可能とする病虫害防除体系

[要約] 構築した防除体系を用いると、一番茶および二番茶は、EU、台湾、米国へ、秋冬番茶は台湾へ輸出可能である。

[キーワード] 輸出防除体系、残留特性、EU、米国、台湾、一番茶、二番茶、秋冬番茶

[担当部署] 八女分場；茶・中山間地作物チーム

[連絡先] 0943-42-0292

[対象項目] 茶

[専門項目] 病虫害

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

新たに策定された「農林水産物・食品の輸出拡大実行戦略」では、茶の令和7年輸出目標額が312億円に設定されている。これまでの輸出は一番茶を中心に行われており、輸出拡大には二番茶以降の取り組みを増やすことが重要であるが、夏秋期は病虫害の発生が多く進んでいない。また、一番茶の輸出先は摘採する数か月前に決まることもあり、輸出相手国が前年と変わった際に対応できない問題もある。そこで、長期残留しない農薬を用いて、年間を通して茶の輸出を可能とする病虫害防除体系を構築する。

[成果の内容・特徴]

1. 長期残留しない農薬を用いて、病虫害防除体系を構築した（表1）。
2. 各茶期における農薬残留分析の結果から、一番茶および二番茶は、米国、台湾、EUの残留農薬基準値未満である。秋冬番茶は、一部農薬が検出される可能性があるため台湾へのみ輸出可能である（表1）。
3. 構築した防除体系を用いると、病虫害の発生を年間通して収量への影響がみられない範囲に抑えることができる（図1、一部データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 供試した農薬は輸出用栽培茶の防除暦に組入れて活用できる。
2. 残留農薬基準値は更新されるため、輸出相手国の残留農薬基準値はその都度確認する必要がある。
3. 輸出向け栽培では、近接園地からの農薬飛散や製茶段階での茶葉の混入を防止する必要がある。このため、輸出用の園地は他の茶園や果樹園等と隣接しておらず、専用の機械や工場を使用することが望ましい。

[具体的データ]

表 1 長期残留しない防除体系での残留値と米国、台湾、EUの残留農薬基準値（令和 5 年）

散布時期	供試薬剤	散布日	残留値(mg/kg)			残留農薬基準値(mg/kg)		
			一番茶	二番茶	秋冬番茶	米国	台湾	EU
一番茶前	ブルー ト MC ¹⁾	2/21	0.01	—	—	15	5.0	15
	バロックフロアブル	3/17	— ²⁾	—	—	15	5.0	15
	ミルベノック乳剤	4/13	—	—	—	不検出 ³⁾	2.0	0.10
二番茶	アグリメック	6/5	—	—	—	1.0	0.10	0.05
一葉期	コサイド 3000	6/5	—	—	—	—	—	—
刈り 落とし後	カスミンボルドー	7/13	—	—	—	不検出	0.04	0.01
秋芽萌芽 ～一葉期	ウララ DF	8/3	—	—	0.08	40	5.0	0.10
	スピノエースフロアブル	8/3	—	—	—	2.0	1.0	0.10
	フロンサイド SC	8/3	—	—	—	6.0	5.0	0.10
秋芽 三葉期	アフーム乳剤	8/22	—	—	—	0.50	0.05	0.01
	マイトコーネフロアブル ⁴⁾	8/22	—	—	—	不検出	2.0	0.10
	アミスター20 フロアブル	8/22	—	—	0.09	20	5.0	0.05
9 月	ガンバ水和剤	9/28	—	—	—	不検出	5.0	0.01
上中旬	ディアナ SC	9/28	—	—	0.03	70	3.0	0.10

注) 1. 2年に1回の散布

2. 「—」は検出限界未満を示す。

3. 不検出は検出限界未満である必要がある。

4. 令和4年現地実証区の秋冬番茶でマイトコーネフロアブルが0.32 mg/kg検出された。

5. 摘採日：一番茶（5/5）、二番茶（6/22）、秋冬番茶（10/12）

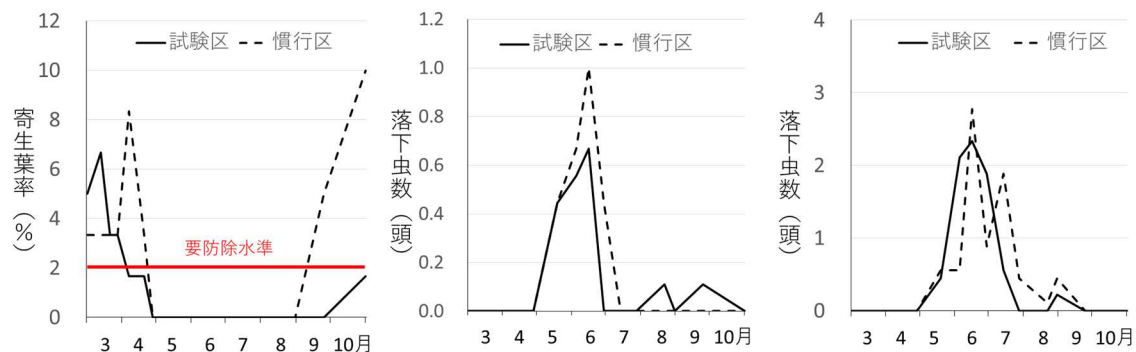


図 1 長期残留しない防除体系の防除効果（令和 5 年）

（左：カンザワハダニ、中：チャノミドリヒメヨコバイ、右：チャノキイロアザミウマ）

注) 1. 試験区：長期残留しない防除体系、慣行区：八女茶栽培層による防除体系

2. カンザワハダニは20葉の寄生葉率、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは5回たたき落としによる落下虫数。いずれも3反復。

[その他]

研究課題名：年間を通して茶の輸出を可能とする病虫害防除体系の構築

予算区分：国庫受託（国際競争力強化技術開発プロジェクト）

研究期間：令和 5 年度（令和 3～5 年度）

研究担当者：妹川知史、末次雄哉、酒井明日香、平尾 瞳、池田浩暢、中園健太郎、井上梨絵、南家進吾、小熊光輝